

『今月の天候と農作業』

通巻第5569号
7月号
平成26年6月26日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

期間の前半は日照時間の少ない状態が続く見込みです。

【九州南部1か月予報】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は以下のとおりです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	40	40	20
降水量	九州南部	10	40	50
日照時間	九州南部	50	40	10

【概要】

期間の前半は、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。期間の後半は、平年と同様に晴れの日が多い見込みです。

向こう1か月の平均気温は、平年並または低い確率ともに40%です。降水量は、多い確率50%です。日照時間は、少ない確率50%です。

週別の気温は、1週目は、低い確率60%です。

<1週目の予報> 6月28日(土)～7月4日(金)

梅雨前線や低気圧の影響で平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

※明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報(<http://www.jma.go.jp/jp/week/>)を参照してください。

<2週目の予報> 7月5日(土)～7月11日(金)

前線や湿った気流の影響で、平年に比べ曇りや雨の日が多いでしょう。

<3週目から4週目の予報> 7月12日(土)～7月25日(金)

太平洋高気圧に覆われ、平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

普通作物

◆ 早期水稲

1 水管理と防除

台風時は深水管理とし、通過直後も玄米品質低下防止のため急な落水は控えます。収穫5日前までは水管理を続けます。毎年カメムシ被害が多いので、周辺への薬剤飛散に注意し防除します。

2 収穫と乾燥調整

収穫は全籾の8割が黄化した時期で、早刈りでの青未熟粒や、遅れでの胴割れ粒に注意します。収穫後は速やかに乾燥作業へ移し、乾燥は送風温度40度以下で行い、水分14.5～15%に仕上げます。

◆ 普通期水稲

1 水管理

倒伏防止や、適性な穂数で玄米白未熟粒の発生を軽減するため、茎数が20本程になったら中干しをしっかりと行いましょう。なお、過度の中干しは根が切れて悪影響となりますので、田面に足跡が軽く付く程度とします。中干し後は、走水を1～2回行い、その後は間断かん水で管理します。

2 病虫害防除と追肥

ウンカ、コブノメイガ、葉いもちなどが発生しますので、ほ場での観察と予察情報をもとに適期防除を行います。追肥は、「ヒノヒカリ」では幼穂の長さが1匁になってから葉色に合わせて施用します。「おてんとそだち」の施肥量はヒノヒカリより少なめに行います。

◆ 大豆

1 ほ場の準備

施肥は苦土石灰で酸度矯正を行い、元肥量は前作を考慮し行います。発芽が揃うよう耕耘は丁寧に行い、ほ場周囲には排水溝を設置します。

2 播種

発芽安定と鳥害軽減のため、種子は薬剤を粉衣し播種します。条間60～70匁、株間20～10匁位で播き、覆土の厚さは2～3匁にします。播種が7月下旬以降になる場合は密植にします。

(鎌田 博人)

施設野菜

◆ 夏秋野菜の高温対策

中山間地域の露地きゅうり、雨よけトマト、ピーマンなどでは本格的な収穫時期となります。

雨よけ栽培では梅雨明け後の高温対策が重要となりますので、ハウスは日中できる限り解放し換気に努めるとともに、寒冷紗などを利用し2割程度の遮光を行いハウス内の気温や果実、葉の温度が上がらないように管理します。

特に、曇雨天後の晴天日は萎れやすくなるので、早朝からのかん水や、翌日が確実に晴れの場合は、前日の夕方のかん水も効果的です。

なお、薬剤散布は、高温時に行うと葉焼け等の障害が発生しやすいので、午後温度が低下する時間帯に行います。

◆ いちごの育苗管理

年内の収量を確保するため、7月中旬までには採苗を終え良質苗の生産に務めましょう。採苗後のかん水は、晴天時は早朝に充分行いますが、乾燥するようであれば午後にも夜間に過湿にならない程度にかん水します。

子苗時期の施肥量は多すぎないように注意し、施肥は鉢底から根が確認できる時期から行います。

育苗期の管理として病虫害防除が重要となりますが、炭そ病は定期的な薬剤散布を行い、発病が疑われる場合には周辺の株とあわせ直ちに処分してください。ハダニについても発生を見たら直ちに防除を行うなど徹底した管理を行います。また、うどんこ病についても育苗床での徹底防除が重要となります。肥料であるケイ酸カリを1株あたり2～3g²施用することにより本圃での発病を抑制する効果があります。

(黒木正晶)

葉茎根菜類・いも類

◆ 秋冬野菜の土づくり

にんじんやだいこん、ほうれんそうやキャベツといった秋～冬にかけて栽培する作物の収量・品質を高めるためには、夏場のほ場管理が重要で、土壌pHの矯正や深耕や堆肥等の有機物の投入による土づくりを行います。

◆ かんしょ

4月植付けのマルチ栽培が収穫期となります。植付け後110～130日が収穫の目安で、今年は初期の低温で生育がやや遅れましたが、その後は天候も回復し平年並みの肥大が予想されます。90日を経過したら試し掘りを行い、芋の肥大状況を確認して収穫を始めてください。また、収穫が遅れると皮色や形状が悪化しますので適期収穫に心掛けましょう。

◆ さといも

芋の肥大には土壌水分が大きく影響するため、かん水を行い草勢の維持に務めてください。

3月植えの石川早生が下旬から収穫期となります。試し掘りを行い肥大状況を確認してから収穫を始めてください。また、収穫が遅れると「水晶芋」が発生し品質低下につながりますので、収穫は計画的に行い8月中旬には終了するよう心掛けてください。

中生種は7月上旬から子芋の肥大、孫芋の着生時期となりますので、梅雨明け頃を目安に追肥・土寄せ行ってください。また、晴天が続きほ場が乾燥すると芽つぶれ症状が出やすくなりますので、適宜かん水を行い品質向上に努めてください。

◆ しょうが

普通栽培では、上旬が1回目の追肥の適期となります。10㎡当たり窒素成分で3～5kgを施用し、追肥効果を高めるために土寄せも併せて行ってください。また、梅雨明け後の高温乾燥期は乾燥害を受けやすくなるため、適宜かん水を行いますが、畝間に湛水する場合は滞水しないよう注意が必要です。

(河野 健次郎)

果樹

常緑果樹

◆ 温州みかん

7月中旬から収穫前までが仕上げ摘果の時期になります。今年の温州みかんは、全体としてはある程度の着果が見られます。

極早生温州では、7月10日の果実横径は、38～48mmが理想です。結果量が多く、肥大の悪い樹については早めに仕上げ摘果を開始し、結果量が

少なく、肥大の良い樹については、仕上げ摘果を遅らせましょう。

結果部位によっても摘果時期が異なります。樹冠下部は早めに、樹冠上部は遅めに摘果することで、適正な肥大を確保しましょう。

樹冠上部の天なり果を摘果すると、夏枝が発生するので、収穫時に除去しましょう。

◆ 完熟きんかん

開花期のアザミウマ類や灰色カビ病の発生は、果実品質を大きく低下させます。開花期の防除を実施するとともに、枝をゆすって、花びら落としを行います。

満開期にビニル被覆を行った園地では、高温による結果不良が出始めるので、早めに除去しましょう。

◆ マンゴー

7月下旬以降の剪定は、第二新梢の充実が悪くなることから、翌年の花芽形成を悪くすることがわかっています。早めに剪定を行うよう心がけましょう。どうしても下旬以降の剪定になる場合は、8月まで剪定時期を遅らせて、第二新梢を発生させない方法により、翌年の出荷時期を早める方法について、検討しましょう。

剪定を行ったら、発芽を早めるために夜間の保温や昼間の蒸し込みを行いましょう。

既に新梢の発生している園では、葉面散布や発根促進剤の利用、新梢の整理によって、新梢の充実促進を図りましょう。

施肥は、土壌分析の結果を見てから、必要に応じて実施しましょう。

(山口和典)

花き

◆ キク共通

梅雨が明けると6月からの曇雨天から一転し、日差しの強い日が続きます。葉焼けなどが発生しやすい時期になりますので、本ぼでは遮光や換気を行い、葉温の低下を図りましょう。親株ほ場においては防除を徹底し、苗とともにアザミウマ類やダニ類、白さび病を本ぼに持ち込まないよう気を付けましょう。

◆ 夏秋ギク

「フローラル優香」の8月出荷では花芽分化・発達を促すために消灯後から12時間日長で2週間程度のシェードを実施して下さい。夜間はシェードを開放し、気温が高くなならないよう管理して下さい。高温や消灯遅れ、多肥によって貫生花の発生が多くなりますので、適正管理に努めましょう。

また、「精の一世」では高温の影響により開花遅延や奇形花が発生しやすくなりますので、日中は十分な換気を行いましょう。

◆ 秋ギク電照

「神馬」系品種は穂の冷蔵期間が長くなると定植後の活着が悪い傾向にありますので冷蔵期間は3週間を目安としましょう。「神馬 66-4」「神馬 2号」は高温に遭遇すると腋芽が出にくくなり、穂が不足する場合がありますので、親株床はできるだけ涼しくし、親株の株数も余裕を持って植え付けを行いましょう。

◆ 洋花類

秋に定植するほ場の土壌診断を必ず実施し、分析・診断結果に基づいた施肥を行いましょう。また、改良太陽熱消毒等の土壌消毒を実施し、連作障害の回避に努めて下さい。トルコギキョウ、デルフィニウムは冷房施設等を利用した育苗期になりますので、適切な温度管理を実施して、早期抽だいやロゼット防止に努めてください。

◆ ホオズキ

8月出荷分は上旬から段階的にピンチ・着色のためのホルモン処理を実施して下さい。今年度は各種病害虫の発生が多く見られますので、ホルモン剤散布の1週間前までにはアザミウマ類・ダニ類・うどんこ病等の防除を徹底してください。ホルモン剤散布後の高温は色ムラ発生の原因になりますので、散布はできるだけ涼しい早朝に実施し、散布後数日は必ず寒冷紗により遮光してください。

◆ シキミ

春に定植した苗については、梅雨明け後の急激な高温・乾燥により枯死する危険性がありますので、かん水の実施や株元に敷きわらなどを実施し、極度な乾燥を防ぎましょう。

(中村 広)

畜産

◆ 家畜

今月は梅雨が明け、本格的な夏を迎えます。暑さに十分に馴れていない家畜や家禽にとっては、熱射病の発生が多くなる時期です。暑熱対策として、畜舎の風の通りを良くするとともに、換気扇や細霧装置を動かし、夏期対策を十分に行いましょう。また、畜産内への直射日光を遮蔽するために、寒冷紗を設置したり、屋根散水や屋根への石灰塗布を行うことも、有効な暑熱対策となります。

乳牛に関しては、暑熱ストレスが高まる時期になります。ヒートストレスメーターの温湿度指数（T H I）を毎日チェックしましょう。T H I 値が67以上の場合、牛舎ファンを常に回し、牛体に風が当たるよう暑熱対策をしっかり行います。夜間に牛体を冷やすと乳量が増加しますので夜間のT H I 値のチェックも行いましょう。乳牛は大量の水を飲みます。牛がいつでも新鮮な水を飲めるようにしてください。

豚や鶏では、出荷前の肉豚やブロイラーの事故率の上昇を抑えるために、飼養密度を低くして、飼養環境の改善を図りましょう。また、ウインドウレス畜舎やセミウインドウレス畜舎では、クーリングパッドなどを利用して舎内温度を下げましょう。さらに、飼料の腐敗には、十分注意するとともに、ウォーターカップやピッカーなどの飲水の確認も十分に行ってください。

◆ 飼料作物

牛の粗飼料では、サイレージが腐敗しやすい時期になります。サイレージの色が黒っぽかったり、手で触って熱く感じる場合、いつもと匂いが違う場合は要注意ですので給与しないでください。

◆ 家畜防疫対策

豚流行性下痢（P E D）が依然として沈静化しない状況にあります。引き続き家畜防疫の徹底を行うとともに、P E D ワクチンの妊娠豚への摂取の徹底をお願いします。

（三角 久志）

特用作物

◆ 茶

1 三番茶の摘採

二番茶の摘採から30～35日で三番茶の摘採となります。この時期は新葉の硬化が早いので摘み遅れに注意し、お茶の価格と経費を考慮した計画的で無理のない摘採を心がけてください。

2 病虫害の防除とチャトゲコナジラミの発生に注意

新芽生育期に発生が多いチャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ、ハマキムシ等の害虫や摘採後に発生する輪斑病等の防除を実施します。

また、県内の茶園でもチャトゲコナジラミの発生が確認されました。この害虫は、茶の新芽生育期に成虫となり茶園を飛び回りますので、摘採時には、茶園や製茶工場の生葉置き場を観察してください。なお、本虫に対する問い合わせや、見慣れない虫を発見した場合には、最寄りの農業改良普及センター等の茶関係機関へ連絡してください。

3 更新茶園の整枝

一番茶後に中切りした茶園では7月上旬と8月上旬に2回の整枝を行い、二番茶後に中切りや深刈りした茶園では8月上旬に1回整枝を行います。整枝は、いずれも中切りや深刈りの位置から3～5センチ上げた位置で実施してください。

4 幼木園の管理

定植当年の露地苗は根域が浅いため、梅雨明け後の干害に注意して下さい。また、ペーパーポット苗の場合も、植え込みが浅くポットの上部が地表から出ている場合には、ポット内の土壌が乾燥し苗が枯死することがありますので、土寄せや敷きワラ等を行い、土壌の乾燥を防ぎます。

1～2年生の幼木園では、台風の襲来に備えて、7月中～下旬に徒長枝の摘心やせん枝を行います。また、ソルゴーの間作は防風効果が高く台風対策に有効ですので、7月上旬までに播種してください。

(佐藤邦彦)

◆ しいたけ

伏込み地の湿度管理と高温対策を徹底し、健全なほだ木づくりに努めましょう。

1 裸地伏せの場合

笠木を厚さ30センチ程度に補充し、直射日光による高温障害に注意するとと

もに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

2 林内伏せの場合

直射日光が当たる箇所には、笠木の補充や遮光ネットを設置しましょう。特に湿気が多い場合は、ほだ木の積み替えや天地返しを行うとともに、周囲の刈払いを実施し、風通しを良くしましょう。

3 人工ほだ場の場合

特に高温・乾燥の害を受けやすいため、遮光ネットによる庇陰の調整や散水などにより、温湿度の管理を徹底しましょう。

(小田 三保)

◆ たばこ

今月は、総掻きが主な作業となります。

1 総掻きは、十分に熟度を進めて行い、未熟葉の収穫を避けるため、上位本葉の成熟を確認して開始しましょう。また成熟の目安としては葉色でなく、葉や中骨が左記の状態になっているか確認してください。

- ① 葉の表面が凹凸になり葉先が枯れる。
- ② 葉全体が下方に巻き葉柄部が下がった時。(肩を落とす)
- ③ 上位葉(4枚目)の中骨が白化して中骨の表面が平らとなり中心にミゾができ、ポキッと明音がして折れやすくなる。

◎総掻き時の注意点としては下記の通りです。

- ① 着位区分は徹底しましょう。
- ② 持てない流れそうな合葉の拾い取りを確実にし、収量確保に努めましょう。
- ③ 上葉は標準的な心止めをした作は3～4枚を目安に区分収穫し、包内品位を高めましょう。
- ④ 立枯葉は活力のある内にグジリ取りを行いましょう。乾燥は、当日吊し込みが良いです。

2 残幹根は土壌中の菌密度増加につながりますので、収穫終了後、早期に除去し、ほ地外へ持ち出して、耕種的防除に努めましょう。

3 異物・異臭・虫害発生防止のため、定期的な確認と作業場の清掃を行いましょう。

また早期販売に向け、水分・異物・虫害の確認を行い、出荷の事前準備を行いましょう。

(井上 馨)

内容の詳細について

7月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県営農支援課及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nougyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 か月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稻	葉いもち 紋枯病	やや少 並	<p>葉いもちが発生している場合は、穂ばらみ期から穂揃期の防除を確実に 行います。</p> <p>カメムシによる被害は、早期米の等級格下げの重要な要因ですので発生 に注意し確実に防除します。穂揃期とその7～10日後の2回防除を徹底しま す。多発して防除後も残存虫が確認される場合は、さらに3回目の追加防 除を行います。</p>
	ウンカ・ヨコバ イ類	並	
	斑点米カメムシ類	並	
普通期水稻	葉いもち	並	<p>本田での初発生に注意し、早期防除に努めます。</p> <p>移植時に箱施薬をしていないほ場では、防除が手遅れにならないよう に注意します。</p> <p>セジロウンカの初飛来を6/6都城にて確認しています。コブノメイガは6 /23の巡回調査において成虫及び被害株を確認しています。トビイロウン カの飛来はまだ確認されていませんが今後とも当センターの発生予察情報 等に注意してください。</p> <p>ニカメイガは、近年飼料イネにおいて被害が広範囲で確認され、本年は 早期水稻についても被害を確認しています。7月上中旬頃の発蛾最盛期に 粒剤を施用するのが効果的です。</p> <p>スクミリンゴガイの生息数が多い場合は、捕殺するか粒剤の水面施薬を 行います。</p>
	ウンカ・ヨコバ イ類	並	
	コブノメイガ ニカメイガ スクミリンゴガ イ	— — やや多	
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ タバコガ・オオ タバコガ	並 並 やや多	<p>アブラムシ類は、各種のウイルス病を媒介しますので育苗期から周辺の 寄主植物を含めて防除します。育苗施設は野外からの飛び込みを防ぐため に、防虫ネット等で被覆すると効果的です。</p> <p>ハスモンヨトウは、ふ化直後に葉裏で集合して加害しますので、この時 期の発見に努め、若齢幼虫期に防除を行います。</p>
ウリ類	黄化えそ病 (MYSV)	—	<p>媒介虫であるミナミキイロアザミウマの生息密度を抑制するため、定期 的に防除するとともに、ほ場周辺の除草に努めます。</p> <p>本病と疑われる症状が発生した場合は、最寄りの農林振興局・西臼杵支 庁（農業改良普及センター）または当センターまで連絡をお願いします。</p>
いちご (親株)	炭疽病 ※	—	<p>親株から採取した葉を検定した結果、感染株率が過去9年間で6番目とな っています。防除情報を発表していますので参考にして下さい。</p> <p>親株における本病の検定に努め、感染が確認されれば適切に処分すると ともに、健全な親株への定期的な更新に努めます。</p>
果樹全般	果樹カメムシ類	並	<p>成熟の早いナシ・ブドウ等の果樹類を集中して加害する恐れがあります ので、園内外を見回り、早期発見・早期防除に努めます。</p>
カンキツ (露地栽培)	黒点病 かいよう病	やや多 やや少	<p>黒点病は、降水量が多いほど発生が多くなるので、前回の防除から積算 降水量250mmを散布間隔の目安として薬剤散布を行います。</p>
	ミカンハダニ チャノキイロアザミウマ	並 並	<p>いずれも生息密度が高くなると防除が困難になるので、早期発見・防除 に努めます。</p>
茶	炭疽病	並	<p>二番茶残葉に炭疽病の発生がみられる茶園では、三番茶でも多発する恐 れがあるため、三番茶萌芽期～1葉期に重点的に防除します。</p>
	カンザワハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホガ チャノミドリヒメヨコバ イ チャノキイロアザミウマ クワシロカイガラムシ	並 並 並 やや少 並 並 並	<p>カンザワハダニ、チャノキイロアザミウマは、多発してからでは防除が 困難になるので早期発見・防除に努めます。</p> <p>チャノコクモンハマキとチャハマキの防除適期は、初蛾最盛期の7～ 10日後で、両種の発蛾最盛期の差が10日以内であれば同時防除が可能で す。</p> <p>クワシロカイガラムシの防除適期は、幼虫ふ化最盛期です。時期を逸す ると防除効果が低くなりますので、ふ化状況を確認してから薬剤散布を行 います。</p>

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※については防除情報を発表していますので、詳しくはホームページをご覧ください。

病害虫防除・肥料検査センターのホームページアドレスは、<http://www.jpnp.ne.jp/miyazaki>です。